

ホルモンの発見と精製の歴史

オキシトシン／オキシトシンがヒトと犬との絆形成に関与することの発見

オキシトシンによるヒトと犬との絆形成

執筆者

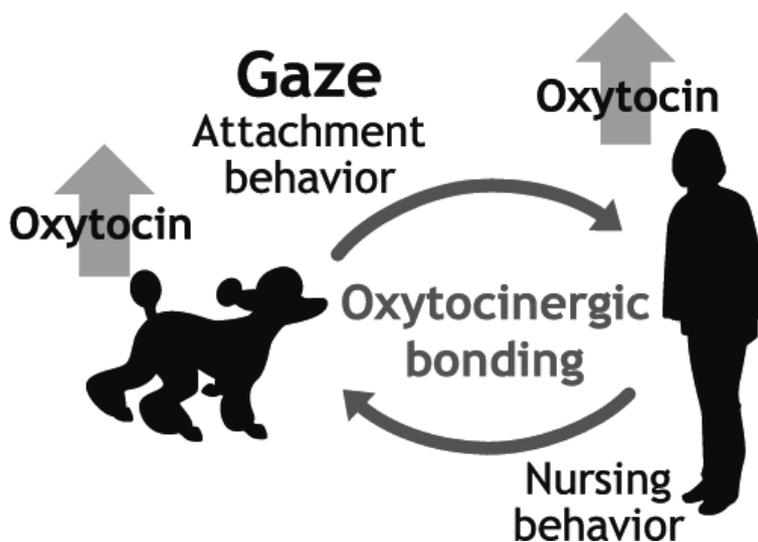
菊水健史

麻布大学獣医学部

近年、ヒトとイヌの間に成立する深い社会的絆の生物学的基盤として、「オキシトシン」が注目されている。オキシトシンは視床下部で産生される神経ペプチドで、1955年に、アメリカの生化学者であるヴィンセント・デュ・ヴィニョーが、オキシトシンとバソプレシンの分析と合成に関する研究でノーベル化学賞を受賞した。その後、哺乳類の出産や授乳行動に関わる母性ホルモンとして研究が発展し、近年は親子間の愛着形成、対人信頼、共感行動などに関与する「絆のホルモン」としてその機能が明らかになった。

麻布大学の研究チームは、ヒトとイヌが互に見つめ合うことで、双方のオキシトシンが上昇し、それが絆形成を促進するポジティブなフィードバックループを構築していることを、世界で初めて明らかにした。この実験では、飼い主とイヌが視線を交わした後に、それぞれの尿中オキシトシン濃度が有意に上昇することが示され、オキシトシンが種を超えた絆形成に寄与することが示唆された。

この発見は、ヒトとイヌの共進化的関係を理解する手がかりとなるだけでなく、動物介在療法や心の健康支援における科学的根拠としても重要である。オキシトシンは単なる生体物質ではなく、社会的環境との相互作用によって動的に変化し、相互信頼や安心感を育むメカニズムの鍵を握っており、今後の社会と身体をつなぐ機能の研究の発展が待たれる。



オキシトシンによるヒトと犬との絆形成の構図